

IV-41

岩手山周辺地域の持続可能な地域デザインについて

岩手大学 正員 安藤 昭 正員 南 正昭
正員 赤谷隆一 ○学生員 中居伸明
学生員 平野裕一

1. はじめに

平成10年4月以降活発化した岩手山の火山活動は、岩手山麓周辺地域の農林業、観光業等の地域経済に多大な被害を与えた。さらに岩手山麓地域は、雄大な自然が生み出す景観と高山植物や野生動物が豊富に存在することから、貴重な地域遺産（自然・文化・産業）を有する地域として広く知られているが、火山活動の影響はこれらの地域遺産の存在を脅かすばかりではなく、持続可能な地域社会の形成を妨げるものであり、持続可能な地域づくりの理論構築が必要とされている。

そこで本研究では、感覚統合理論による都市景観設計の体系化、日本の都市の原型である里山等に関する研究などを踏まえて、地域の本質の解釈につとめ、岩手山周辺地域において持続可能な地域づくりの体系化手法の確立のための実証的研究を行う。

2. 研究対象地域の概要

研究対象地である岩手県松尾村は、人口7,069人（平成15年12月31日現在）、総面積234.85km²、岩手県の北部に位置し、北東から南東に十和田八幡平国立公園を擁し、南西に主峰岩手山を抱く緑豊かな町である。

昭和20年代には、松尾鉾山での硫黄の採掘精錬により活況を誇ったが、昭和30年代以降、十和田八幡平国立公園を中心とする自然資源を利用した大型観光地化を図り、スキー場、温泉街、ペンション街等を開発し積極的に活用している。

また、平成2年には岩手県内初の景観条例を制定し、その後も各種の施策により、景観保全、景観づくりに力を注いでいる自治体である。

3. 研究の方法

現存の景観を分析するためには、景観要素間で相互に関係しあっている景観要素の形態と植生や地因子、さらには郷土祭事などの動的要素に関する情報を風土とし、世の中の事象はすべて相互依存しているという「系」の視点から解析をおこなうことが肝要である。

従来は、このような複雑な景観システムに関する情報を個別に、アナログ的に解析し、景観設計を行ってきた。しかしながら、従来の手法では、プランナーの感性や習熟度に因るところが大きいため、本研究ではGIS（地理情報システム）を用いて、景観要素のデータベースとして、個々の要素単位でその位置情報と属性情報を関連させて管理し、場所や属性情報の効率化を図った。

（1）記憶素材採取調査の結果から得られた地域資源、イメージ再生率、位置情報についてのデータベースを構築した。これを

GIS上で表現することにより、評価主体が持つ、村の言語的イメージ構造の把握を容易にする。ここでいう評価主体とは、ローカルイメージのキュービックモデルに基づくもので、特に、今後農村地域の景観は、開かれた美しく個性豊かな景観として育成していく必要があるとの認識から、評価主体を住民・転出者・来訪者として選定し、構築されたものである。（2）村の意味的イメージ構造を把握するために、制限イメージ連想調査を行い、連想階層図を描き出し、地域デザインのためのデザインテーマを創出する。

（3）地域デザインのためのデザインテーマが、火山災害によって受ける影響を把握するために、岩手山火山災害対策図と地域資源の分布をオーバーレイし、デザインテーマについて考察する。

4. 結果および考察

（1）村の言語的イメージ構造について

図1、図2に評価主体別の言語的イメージ再生要素の分布およびイメージ強度を挙げる。

定住者、転出者、来訪者の3者の共通イメージは、「自然」「交流施設」「観光・レクリエーション施設」のキーワード群と「松尾鉾山」である。自然として再生された要素は八幡平に代表される国立公園一帯に分布する要素であり、松川温泉、八幡平温泉郷、安比高原等の全国的に有名な要素に加え、盛岡市民を来訪者として選定したことから、気軽に訪れられる産直販売施設である松ちゃん市場やトラウトガーデン等が再生された。また、この他にも、定住者に固有、定住者・来訪者に固有などの状況も直感的に把握することが可能である。

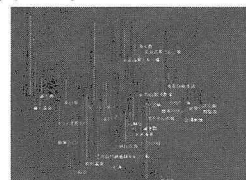


図1 評価主体別の村のイメージ分布及びイメージ強度

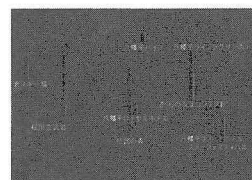


図2 評価主体別の村のイメージ分布及びイメージ強度（拡大図）

（2）地域デザインのデザインテーマの創出

地域デザインを考える際、当該地域の風土イメージを抽出することによって得られた記憶素材に意味づけをし、都市のフィジカルパターンとエコシンボルを重ね合わせ、象徴化することにより描き出された都市形態とを、各々のコンフリクトを調整し、オーバーレイしてデザインテーマを与えるという、

—513—